

のぞみ

尾崎美和

のぞみの影を求めて表通りに立った。

飛び出してきた扉が背後で静かに閉まる。黒塗りで、頑丈で、憎らしいぐらい落ち着き払っている。棺おけの蓋みたい。確か、この扉の前に初めて立ったのぞみはそう言った。そして堂々とエントランスに足を踏み入れた。

のぞみは、おそらく今朝、この扉を自ら開けて出ていった。胸が苦しくなる。車が次から次へと汚れた風を吹き散らしていく。いつもの表通り。いつもの朝。何ごともなかったような顔をして、街はすっかり起き出していった。

そして、私の部屋には彼女の痕跡がいやというほど残されている……。のぞみは棺おけの中にでもいたつもりかもしれないが、とんでもない。痕跡は生々しく、すべてをか

き集めるとのぞみがそっくりできあがりそうなくらいだ。

どちらへ足を踏み出そう？ 膨らみすぎた風船のように頭がゆらゆらする。クラクションを鳴らし合う車。猛スピードの自転車。寡黙な歩行者。それらを苦しそうに照らし出す、建物に阻まれてちぎれた朝日。どれもつるつると、疲れた角膜を滑っていく。

思い出……。ふとそうつぶやいた。思い出。そうだ、のぞみとの最初の思い出があるではないか。表通りを左に行つて、角を曲がった先のコンビニ。地下鉄のB5番出口を上つたすぐのその場所で、私はのぞみと初めて出会つたのだ。彼女は地下鉄に乗っていたと言つた。そこで、スリと痴漢と置き引きに遭い、無賃乗車と万引きをした。そ

の夜更けに、ハイヤーから降りてコンビニに入ろうとしていた私に声をかけたのだ。

「おねえさん、これ買ってくれない？」

犯罪にまみれた不幸をそらんじるように語つたあと、のぞみが差し出したのは大空の写真集だった。

「千円でいいわ。どうせタダで仕入れたものだし」

日の光が全く届かない地下のキオスクに、青空や朝焼けや夕焼けに染まるうろこ雲などの写真集があるなんて、どこか虚をつかれた感じがして、私は、写真集を持つ手、腕、肩、首、そして顔と疑り深く見ていった。

「二千円もするのよ」

へたな商売人のように二本の指を突き立てた。確かにその目には痴漢に遭つた後のようなげさげさがあつたし、頬には無賃乗車をしたずうずうしさ、口元には万引による高揚感みたいなものがちらついていた。そして写真集以外は何も持たず、無一文のようだった。

「買わない」

きっぱり断つたが、すぐに続けた。

「その代わり、うちに来なさい。温かいもの食べさせてあげる」

そのときののぞみの目ときたら。異様な光を放つてクルリと一周した。それから思わせぶりに視線を私に向けて、ぶかぶかのコートの襟を片手で掻き合わせて、「いい

わ」と言つた。わざとらしいような、それでいてきつく抱きしめたくなるような仕草だった。

ごん、と音がした。うしろ手で、コンビニのゴミボックスに写真集を投げ入れたのだ。彼女は大空を手放し、私のマンション——そう、棺おけへと足を向けたのだ。羽織っていたカシミヤのコートを半分開いてのぞみを包んだ。そのとき、のぞみの髪が真っ黒で、肩のところでもふさふさと溢れそうに揺れていたのを覚えている。

気がついたら左に向かつて歩き出していた。だんだんと早足になり、何人かを追い越す。足がもつれそうになる。もしかしたら、あの中にいるかもしれない。角を曲がり、迷わずコンビニに入った。

「らっしやいませー」。威勢のいい声が飛んでくる。

あてもなく店内をうろつく。女がこちらを見ていると思つたら、柱の鏡に映つた私だった。三十代半ば。そのことを知っているからそのように見える。他人が見たらどうだろう。額を出したボブ。白いシャツにダークグレーのパンツスーツ。ページュのハイヒール。無難な格好の働き盛りの女が、これから働きに行くところ。それにしても目が赤すぎることを、誰も気には留めないだろう。

ゆうべ零時過ぎ、専務に呼び出されるとそのまま徹夜になつてしまった。このこと自体は珍しいことではなかった。

私はトレーダーをしている。以前の会社で上司だった専務に熱心に誘われて、なかば流されるように顧客ごと引き抜かれてしまった。専務は、しばしば私を呼び出しては、何台も並べたパソコン上に、眠ることのない世界中のマーケットを映して、あれこれ意見交換をしたがるのだ。たいていは夜更けに始まり、その時間帯にはそうすることが決まりごとでもあるかのように、必ずアルコールを飲む。酒の肴が世界中のマーケットというわけだ。専務はまた、その日の私の顧客の様子や、取引はスムーズだったか売上はどうだったかなど、別に緊急に話さないといけないわけではないこともたくさん聞きたがる。もつと踏み込んだことを聞きたい、あるいは私の方から口を滑らせはしまいか、そんな心持ちが、汗をかいたグラスをひねくり回す手つきに表れている。私は、打てば響く素直な楽器になって、聞かれないいちいちに答えるだけだった。そうして、彼なりの接待を享受するふりをする。最も目とお金をかけられている優秀なトレーダーとして。

つまりゆうべも、いつもの長い夜だった。ところが、着替えに戻ったらのぞみがいらない。

コンビニにもいない。そそくさと出る。「行ってらっしゃいませー」。何も買わずに出る客にはそう言うらしい。

ゆうべの場面がよぎる。行ってらっしゃい。風呂から出てきたばかりののぞみは、バスタオルを適当に巻いた格好

化学繊維の上着のポケットをかかさささせて、名刺のよなものを取り出した。ワンデイフリーパス。地下鉄全線利用可。但し購入日一日限り。読みやすいように、私の目の高さまで掲げる。

「これから娘のところに行くんです」

何を言い出すのかと思う。

「ここからほんのすぐの大きなマンションでね。それで今日は泊まるんです。ね、もう地下鉄には乗らないわけですよ。まだまだ使えるのにもつたいないでしょう？ だから、どうぞどうぞ」

そう言っただけの手にはねじ込むと、近づいてきたときと同じようにぺこぺこしながら去っていった。

これが今日でなければ、宗教の勧誘に遭うのとそう違いはないわけだ。いいことをお分けしましょう、と向けられる一方的な笑顔。いつもなら私は逃げるように去って、ねばついていた偽善が心に残らないように別のことを考え始める。

ワンデイフリーパスをまじまじと見た。そしてまっすぐに階段へ向かった。

地下鉄なんてもう何年乗っていないだろう。

ハイヤーの窓の向こう。今朝だって私は、すっかり当たり前前になってしまったあの景色を眺めながら帰ってきた。

艶やかな黒のプレジデントが、専用電話一本で私の元へ駆

でそう言ったのだ。ハイヒールを突っかけながら振り向いたら、もううしろを向いていた。髪は、肩甲骨を隠していた。考えてみたら、のぞみと暮らし始めて半年が経っていた。

地下鉄B5番出口。

何かの罫のように、地面から突き出た四角の枠。もしやのぞみがひょっこり現れるのではないか。淡い期待を寄せせる。そうだ、のぞみはきつとあの写真集を盗みにいったのだ。地下鉄の、白々しい明かりに照らされたキオスクで、再び仕入れられ、性懲りもなく棚に並んでいる大空の写真集。のぞみはそのことを考えると、どこかいたたまれない思いに飲み込まれそうになり、それで仕方なく盗みに行ってしまったのだ。

ほうつと突っ立っていると、黒っぽい格好をした老婦人が近づいてくる。

「すみません」

いやに愛想よく、ぺこぺこ頭まで下げる。宗教の勧誘だろう。めったに街を歩いたりはないが、その少ない機会を逃さず勧誘者は私を見つけるのだった。

「けっこうです」

イエス、の意味にとられないように、わざわざ両腕をばつてんにして見せる。寄り目になって一瞬間まった老婦人は、すぐにその目を細めた。

「いえいえ、もしご入用だったら、と思っ」

けつつける。終電も始発も関係なくなり、やがて時間の感覚を失った。そればかりか街の輪郭がぼやけて見えるようになったのだ。毎日の行き帰り、私の目が映すものは、ハイヤーの窓の向こうを流れていく幾重もの線と光、それだけだった。街を構成するありとあらゆる線が、透き通る朝日や粘るような夜の明かりに重なり、崩れて、意味を失っていく。奥行きさえわからなくなる。昼間の、物憂い明るさの下でも同じことだった。

初めは、気ままな抽象画に取り囲まれたときのように息が詰まりそうになった。けれども、慣れてしまうと、思いもよらないことから守られているような気もするのだった。

半年前、コンビニなんか立ち寄りとしたのはどうしてだったのだろう……。

地下へ迷いなく伸びる階段の両脇、だんだんと存在感を増していくその壁に、ハイヒールの音が共鳴して尾を引く。それを他人がたてる音のように聞きながら、感傷が深まっていく。

……のぞみに出会うためだったのだろうか。

どれだけ深く潜っただろう。階段を下りきると、冷たい色の電灯に照らされて、自動改札機が口をあけている。ワンデイフリーパスを近づけた。待っていました、と言わんばかりに吸い込まれ、さあどうぞ、と吐き出される。ホー

ムはさらに冷え冷えと照らされている。もうすぐ六月になるうとしていて、少し蒸せるぐらいの気温なのに、体まで冷やされそうな気がする。電光掲示板の赤文字は、間もなく電車が到着することを告げている。

のぞみの姿を探す。ホームには二十人ぐらいが散らばり、静止画像のようにじっと張り付いていた。いない。判断するのに三秒とかからない。そういうえば、キオスクもない。

連れ帰った女の子とひととき暮らす。

そんな生活を送るようになったのはいつからだだったか。つい最近のような気もするし、生まれてからずっとそんなことをしているような気もする。

よくわからないということ、ちょうどハイヤー通勤を始めた頃からのだろうと思う。今の会社に移って一年も経たないうちに、専務からハイヤー通勤を認められた。その頃から私は、崩れて意味を失う景色を眺めながら通勤しているのだ。そして、ハイヤーの窓からの景色と同じように、女の子の思い出もまた、流れ、拡散し、どこかへ崩れ去っていくのだった。残念には思わない。むしろありがたくさえ思っていた。すべてをはっきりと覚えていたとしたら、きつとうるさくてたまらない。

いつのまにか、街に出るといことが、女の子を探しに客たちのことを思う。彼らの背後には、長々と横たわったり、尖って突き出たり、渦を巻くように動いたりする何かがある。黒く漂う何か。私にはそれが見える。そして大雑把にその何かのことを「数字の影」と呼んでいた。実際の影は下へ伸びるものだろう。けれども「数字の影」は上へ上へと伸びるのだ。私はその影が形を崩し、ぐらりと大きくぶれて、顧客自身を飲み込む瞬間も見てきた。顧客は小さなうめき声やため息を漏らしたり、弾みをつけるような掛け声を発した。そういった行為は彼らがイエスの決意をしたときの合図だった。彼らがその決意をする時、霧が晴れるように徐々に影は薄くなり、やがて元の形となつて、彼らの姿も現れる。この決意によつて顧客はみな多額の利益を得た。

反対に、何かに抗うように首を振つて、決意しない顧客もいた。その顧客は影に飲み込まれたままだった。私は、真つ黒の向こう側に向かつて頭を下げ、引き下がるしかなかった。影に飲み込まれた彼らには、二度と会えなくなる気がする。そしてたいていその通りになつた。

もう彼らの顔すら思い浮かべることができず、影に飲み込まれたまま正体をなくしたあの場面が浮かぶばかりだ。

通りすがりの人や仕事仲間、バーの店員、美容師……何気なく関わる人の背後に、それなりの影を見つけることもある。問題はその濃さ、大きさ、形なのだ。私の顧客たち

行くということになつていった。食べたいもの、着たいもの、読みたいもの……プライベートのための最低限の物資は、会社のパソコンから発注するようになっていたが、パソコンで発注できない物資は自ら動いて手に入れるほかなく、そのただひとつが女の子というわけだった。

それなりの格好をして街に出る。すると、路地の片隅や横断歩道の前に女の子がいる。もちろん何かの用事があるてそこにいるのだろうが、私は勘を働かせる。動きにどこか迷いがあると見ると、「どうしたの？」と声をかける。女の子は脅えた顔で振り返る。

「うちに来なさいよ」

ピクニックにでも誘うみたいな、健やかな言い方を心がける。たいていの女の子は、何も映していないような空っぽの目をしていて、そのくせ、その目を丸く開けて一生懸命私を見る。私の何をどう判断するのだろうか。今晚の食事ぐらいいは面倒見してくれそうな女に見えるだろうか。または、おみやげのひとつやふたつ持たせてくれそうな女に見えるだろうか。私のまなざしは透き通っていて、それに、慈愛に満ちているにちがいがなかった。その裏側で、ほとんど祈るような気持ちになつている。いつまでも空っぽであつて欲しい。

女の子の背後には、その目と同様、漂わしているものがない。このとき私は、さまざまな面構えをした私の顧

が背負っている影は、桁違いにくっきりして大きく、いびつなのだ。おまけに、当の本人でさえ制御できない意志のようなものがあつて、ある瞬間にたまたまうごめき始めるのだ。

何もかもが空っぽな女の子を伴った私は、一目散に部屋へと向かう。タクシートのリアシートに並んで腰掛ける。黒塗りの頑丈な扉の前で降りる。女の子はまぶしそうに見上げる。誰が見ても豪壮なマンション……御影石が壁に組み込まれたエントランス、静まり返ったエレベーターホール、音もなく進む高速エレベーター、絨毯敷きの内廊下、ポーチの奥にたたずむ玄関ドア。女の子は圧倒された様子で静かについてくる。まるで自分の存在を殺すように息をひそめて。そしておすおすと部屋に入り、リビングにたどり着く。

そのときになつて初めて、わあ……と声を発する。ほとんどの女の子がそうだった。窓の向こうに広がる景色を見ると思わず声が出てしまうようだった。なにしろ、今まで見上げるばかりだった街が、情けないほどに全貌をさらけ出しているのだ。コンクリートの灰色と街路樹らしき緑色が混じつてかすんだあたりから、よきよき突き出た何本ものビル。嘘みたいに広がる空に向かって、必死で背を伸ばそうとしてみたいだ。私はこの様子を見るたびに、でたらめなチャートみたいだと思ふ。ディーラーたち

が毎日ならめつこをしている株価のチャート。ビルの群れも、あれみために、明日の朝には高さのバランスが変わっているかもしれない。そうだとすると、誰がその違いに気がつくだろう。

「どう？ 何だって踏みつけることができそうでしょ？」

確か、丸い頬をした女の子だったと思う。リビングに入るなり窓に駆け寄って悲鳴に近い声を上げたので、おどけた感じでそうささやいた。その子は謙遜するように首を横に振りながら、ただ黙っていた。西日に照らされ、唇の周りがかすかに光っている。うっすらと透明な産毛が生えているのだった。私は彼女の産毛をほんやりと眺めた。

「あのビルがこんなめちゃくちゃだったなんて……」

口元をきらきらさせながら彼女がそう言ったのにもしばらく気がつかないでいた。

「あれはさつきそばを通ったホテルだわ。わあ、高速道路がコースターみたいに曲がりくねってる」

あの子はそれからどうしたのだったか。どれぐらい共に暮らしたのだったか。あのときの産毛のきらめきが浮かぶばかりだ。

女の子は、まずは、リビングからの景色をその空っぽの目に焼きつけてしまおうとした。それから、センターキッチンのあるリビング、猫足のバスタブ、三面鏡の輝くパウダールーム、ホテルの一室のようなベッドルームと次々

り返し聞かせるだけだった。

これまで何人の女の子を連れ帰っただろう。断片として残る思い出を辿ってみるが、正確なことはわからない。

会社では、私が猫を飼っているらしいとの噂がたつた。プライベートのことはまったくと言っていいほど話さないのだが、たまに昼食を交えたミーティングがある。私の仕事は、ディーラーたちがマーケットで買い付けてくるさまざまな有価証券を顧客に紹介し、売ることだ。あの影が見えたところで、常に最新の在庫を把握しておかねば最適な商品を売ることはできない。影を味方につけるには、彼の意志に一致する商品を見極めないといけないのだ。したがって、こういったミーティングでディーラーたちと密な情報交換しておくことは不可欠だった。午前と午後のデイレリングの合間を縫ってのことだし、この時間を無駄にしまいと、積極的に質問したり、確認したり、ときには指示したりもする。マーケットの状況について、食べることも忘れて話し込んでしまうこともある。

けれども彼らには、私の顧客の状況よりも知りたいことがあるらしい。話が切り替わるときなどにそれとなく質問され、適当に答えているうちに、専務に特別扱いされてハイヤー通勤する無愛想な女の、部屋でひとり猫を愛でる私生活ができあがってしまったようだ。それはいかにもさみ

と目に焼きつけていく。このベッドルームはあなただけのものよ、と告げると、再び食い入るように、与えられることになった「自分の部屋」を眺め回すのだった。きつと、知り合ったばかりの女に部屋を与えられる不可解さは、どこかに仕舞いこんでしまうのだろう。

こういった反応の数々は、私の気持ちを少しそいだ。けれども、私が用意するものにわかりやすい魅力を持たせたのも私なのだった。

慣れてくると、「好きに暮らしていいわ」と言う。

「欲しいものは何だかって言って。私が与えてあげる。その代わり外に出ないで。出たらさよならよ」

閉じ込めてしまおうが、出ていきたいと言い出したら拒むつもりはなかった。

まもなく女の子は、仕舞いこんだ不可解さを少々放っておけなくなってくる。

植物のように無口な女の子は、物わがりのいい顔をして、素っ裸に近い格好で私のベッドに寝そべった。突けばパチンと弾けてしまいそうなほど肌の張った女の子は、私が入っていたバスタブに勢いよく飛び込んだ。こういって、不可解さへの稚拙で短絡的な答えには戸惑うこともあったが、いじらしくも思えた。おもちゃじみた細い足首や、未熟な乳首にそっと触れてみた。

私は、呪文のように、「好きに暮らしていいのよ」と繰

しく、また、ありそうな風景だった。

「今度猫ちゃんの写真でも見せてくださいよ」

笑顔を張り付かせ、擦り寄ってくる若い男性社員もいる。

「エアコンつけっ放しなんでしょう？ 猫のためとはいえ電気代もばかにならないわね。うちではとても無理よ」

Aもこんなふうに話しかけてきたりした。Aは会社では数少ない同世代の女性で、彼女もまたトレーダーだった。生え抜きの社員のひとりで、専務のお気に入りだったらしいよと、どこかで聞いた。そのときにはもう過去形だったのだが。

見知った頃はよく飲みに誘われた。彼女はあけっぴろげで、家族の話を多くした。夫は何歳で、何をしていて、そんなに稼ぎはよくないけれど、その分私が働いて、この前はふたりで小さな島に行ったのよ。息子ふたりは生意気さかりで、私のことを名前で呼んだりするの。いやになるわ。私は、いつ彼女と飲みにしても早く帰らなくなった。彼女を相手に、「数字の影」の話はできそうもなかった。もつとも、これまで誰にも話したことはなかったのだ。

前の会社で、初めて月間売り上げ一位を達成したときもそうだった。あのときは、一〇分の商談で三億円を売り上げた。相手は、歩くこともおぼつかない年老いたワンマン社長だった。彼が興じた会社は、投資信託や株、債権を売買して運用したお金で体力をつけていった。しかし、私が

担当するようになってからは、社長はやや気弱になっていった。マーケティングの低迷もあって、思うような利益が得られなく、本業の方も、ゆっくりとだが確実に細り始めていたのだ。

何とかしなければならぬ。私も焦っていた。思いつく限りの商品をかき集め、何回目かの商談で出向いたときだった。思わず息をのんだ。彼が背負っていた影が、いつもの何倍にも膨れ上がっていたのだ。そればかりか、みるみるうちに雄大な山並みのように広がり、老人を覆わんばかりに垂れ下がって、ざわざわと音をたてて揺れ始めた。老人は、何もかも吸い取られたみたいにつれて、腕を組んで目を閉じたまま動かない。死んでいるのか死にかけているのか、私にはそのどちらかしか見えなかった。ざわざわという音はだんだんとやかましくなり、責め立てるような声に聞こえてくる。もう何をするかわからないぞ……動かせる……よりよいどこかに……動かすんだ……さもなければ……こいつもおまえも……。私は覚悟を決めた。引いてはいけない。決意させなければならぬ。額には汗がにじんだ。用意してきた商品のうち、一番高額で複雑な仕組み債を迷わず勧めた。「これ以上安くはできませんが、決して損はさせません」。それだけ言うのがやっとで、まもなく影がぐらりと覆いかぶさってきた。飲み込まれる。私は目をつぶって身を硬くした。

うぞ」と言って、きらびやかな包みをくれた。ほどこいてみると、どこそこの有名シェフが手がけたオーガニック素材の猫のえさなのだ。

ドアに手をかけたときに、賑やかに言い合う声が中から聞こえてきたこともある。

「猫を飼うと婚期を逃すって聞いたよ」

「違うね、婚期を逃したから猫を飼うのさ」

歳上の男性社員たちだった。一般論を言っているのかと思ったが、私が入っていくと慌てて口をつぐんだ。

私は、こういったことにいちいち反応しない。そんなにも猫を飼わせたいのなら、そういうことでいいではないかと思う。たいていのことは、ハイヤーの窓の向こうを眺めているうちにどうでもよくなっていく。重なり合う線と光崩れ、流れていく景色。けれども、その隙間について、はっきりとした雑音が飛んでくることもなくはないのだった。——あなたもふたりぐらいい産んでみればわかるわよ。

Aの声だったらしい。

何がわかるかと言うのだろうか。ハイヤーの中で首をひねる。もし私が子供を産んだとして、彼女の抱えることすべてがそれだけでわかるのだろうか。彼女が私をわからないのと同様に、何をどうしたって彼女をわかることなんてできないのではないか。

雑音に支配されそうになると、努めて窓の向こうを眺め

実際は数十秒ほどのことだったが、ずいぶん長く時間が流れたようだった。何人もの人がいつせいに息を吐いたような音がして、体がふと軽くなった。恐る恐る目を開けた。空気は澄み切っていた。老人は、まっすぐ私を見ていた。皺だらけの艶のない顔の中で、目だけが産まれたばかりのように輝いていて、そして影は、いつもの形に戻っていた。おいしそうなきのこに似た人畜無害な形。このときの取引は、私が予想していた以上の運用利益を老社長にもたらしたのだ。

こんな話、いったい誰にできるだろう。

Aの誘いを三回に二回は断るようになり、ようやく誘われなくなった。

けれども彼女は、そんなことちつとも気にしていない様子で、昼食に出かける前や家に帰る前のわずかな時間にそれとなく近づいてきては何かしら話をしていくようになっていった。親密な関係になりかけたことを忘れないでよ。砕けた言い方にそんな含みを感じた。話している間、バッグの持ち手をしきりに握りなおしたりして落ち着かない。それを見ると私は、専務のあの手つきを思い浮かべてしまうのだった。会話の合間に汗のかいたグラスをひねくり回す、あの手つき。

私のように、いつかどこかの誰かに腕を見込まれて引き抜かれることが夢なのだというある新人女性は、「これだけそうするうちに、私の体が窓の向こうの景色に洗われていく。私自身は流されずに、私を覆う汚れだけが景色に溶け出し、吸い込まれていく……。やがて雑音は、いくつかの角を曲がったあたりで渦を巻き、線と光の重なりの方こうに消えていくのだ。

雑音の行方を追わずに目を閉じ、明日の仕事の段取りを考えていると、そろそろ街に出る頃だどこかで誰かがささやく。

遠くの闇にくすんだ光がにじんだかと思うと、みるみる電車が近づいてくる。

恐ろしく長い。窓の明かりが果てしなく連なっている。ふと、途切れない葬列のようだと思う。誰の？ 考えてみるが答えが出ない。先頭車両が通りすぎてからかなり間があつて、ようやくホームの長さいっぱいには止まる。一斉に扉が開く。風圧と轟音に耐えた人々が、抗議するようにつかつかと入っていく。私も続いたが、さっきまでの勢いがややほんでしまっている。

すっかりよそ者のような心境になって、一番目立たなさそうな席に座る。扉のすぐ横の端っこだ。のぞみを探すとあったって、どこへ行けばいいのかわからないのか。乗ってしまつてから肝心なことに気がつくのだから、私はよほど追い詰められているのだろうか。けれどものぞみが、暗闇の網の目の中を

くるくると運ばれているのは間違いないような気がする。今こそ勤を働かせないといけない。

ふいに、あつと思つた。葬列……。女の子との思い出の断片が次々と浮かんだ。途切れない葬列……。私のやっていることは、まさにそれではないか。次から次へと女の子を拾ってきては、どこかへ葬り続けている。そして断片だけを位牌のように大事に抱えている。

違う。首を振る。そうすることが目的ではないはずだった。私はただ、街にうずもれそうになっている女の子を私の部屋で我が物顔にさせてやりたいだけだった。自分が何者なのかわからない空虚な女の子が、悠々と暮らしているところをただ見たいのだった。

車内は席に余裕があつた。腕時計を確かめる。午前九時。勤め人、学生、身なりのよい老人、若いカップル。明るみに着いては誰かが立ち、また誰かが入ってくる。だいたいよく似た顔ぶれとなる。のぞみ、のぞみ、のぞみ。唇を動かさずに小さくつぶやきながら、充血した目に精一杯の力を込め、人の入れ替りを見守る。

「今日でさよならよ。さあ、街に帰って行って」

閉じ込めておきながら、のぞみ以外の、これまでの女の子には私からそう告げてきた。自分でも驚くほど突然にそんな気分になるのだった。

テーブルに食事があつた。料理本から抜け出したように見事な配置で、色とりどりのおかずと伏せた茶碗が並んでいた。茶碗なんてこの部屋にあつたらどうか。私はしばらくたたずんでいた。

「驚いたでしょう?」

「そうね。声には出さなかった。」

サテンがすれる音がして、茶碗が浮き上がった。彼女が取り上げたのだった。

「軽く、いいですよね?」

キッチンの向こうで、うつむいた彼女の顔に湯気がかかっているのが見えた。少し遅れて、白米の炊き上がった匂いが立ち込めてくる。

「いくら遅くても、何も食べないというのはいけないんじゃないでしょうか?」

女の子はすっかり得意になっている。まるで保護者のような、毅然とした顔で私を振り返った。何かを漂わせている? 背後に、上へと膨らみかけた影が見えるような気がしてぞっとした。

「私だってこれぐらいできるんですよ。だから、これから毎晩——」

私はテーブルから離れ、背を向けることで彼女の言葉をささぎると、別れの言葉を告げた。もう彼女をまともに見ることはないだろうと思ひながら。

例えばこんなことがあつた。

「おかえりなさい」

時計を見る気も失せる夜更けだった。ろくに受け応えもできなかった女の子が、やけにはきはきした声で微笑んで出迎えた。私の腕にじゃれつくように寄ってきて、リビングへ誘導しようとする。

前の日までは、私が帰ったときにはベッドで寝息をたてていた。

「寝ていなかったの?」

いつもよりゆっくりと、探るような言い方になったので、私は自分が腹を立てていることに気づいた。

絶妙な間を空けて、女の子は答えた。

「あなたがこんなに遅くまで働いているのに?」

そうして私の顔を覗き込んだかと思うと、すばやい動きでサテンのパジャマをひるがえし、リビングの入り口に立ちふさがつた。パジャマの淡い紫色が膨張して私の目いっぱいに広がる。

「私、前から知っていたんです。夜はほとんど何も食べないんですよ?」

そう言うと、うしろ手でドアを開けた。晴れやかな顔の彼女の背後から、幸福そうな匂いが漏れてくる。リビングに何が用意されているのかすぐにわかった。彼女の肩をそつと押して、リビングに入る。

あの女の子は、私にどんな断片を残してくれたのだったか。

「何か欲しいものがある?」とたずねると、恥ずかしそうに首を傾げる子だった。私はいくつかの候補をあげて、一番反応がよいと思えたものを与えることにした。傾げる首の角度で違いを読み取るのだ。サテンのパジャマもそのひとつだった。私は根気よく、さまざま候補をあげ続けた。彼女は首を傾げ続けた。そうするうちに多くのものを彼女は手にした。一通り活用してもみせた。小説を読み、クラシックを聴き、アロマキャンドルをともし、爪を磨いた。「とてもいい感じですよ」

彼女は、何を活用してみてもそうとしか感想を言えないのだった。つまり、私が与えるものたちを、ある意味で見事に台無しにするのだ。けれども私は、その決まりきった感想を聞きたかった。底なしの空虚を、何度でも目にしたかった。ときおり高い音の混じるかすれた彼女の寝息は、空っぽの彼女そのもので、私はそれが聞きたくて帰るようなものだったのだ。

それなのにどうしてだろう。女の子たちはそれぞれのやり方で、必ず私を失望させる。ともに暮らすうちに、薄皮を剥いでいくように少しずつ利口になっていくのだ。私の部屋ではそんな必要などないはずなのに。

利口の最初は、たちの悪い嘘だ。本心を包み隠したつも

りで私に向かってくる。そうやって私をからめとろうとしてくるのだ。そうなると思は、何が何でも振りほどきたくなってしまう。

幸福そうな食事。こつこつ編み上げたマフラー。肩をマッサージしようと伸ばしてくる手。感謝の気持ちをしたためた手紙。アイロン掛けされたハンカチ。トイレに飾られた花。肉体そのものを私に投げ出そうとしたときにはいじらしささえ感じたのに、どうしてだか、相変わらず稚拙なのに、これらの嘘はいじらしいとは思えず、来るべきときが来たかと思うだけだった。もうどこでだって生きていけるだろう。そのうちにはどす黒い影を背負うようになるかもしれない。そうなったら万々歳ではないか。そんなふう鼻で笑って、少しやけになつたりもする。

「街に帰っていった」

どの女の子も一度は抵抗する。不思議そうにもしている。私は黙って首を横に振る。すると、にわかに関心をやめ、「わかりました」と言う。「明日あなたが戻るまでに出ていきます」。そのようなことを言う。そしてすると涙を流す。奇妙なことに揃ってそうなのだ。

さらに、仕事を終えた私が、彼女たちが出ていったばかりの部屋で目にするのも揃って同じだった。

彼女たちはみな、痕跡をきれいに消していった。歯ブラシ、マグカップ、化粧品、クッション、下着、パジャマ、

私には目的はあっても行く先がない。立ったり降りたりから取り残されて、ずっと乗っているのは私ぐらいなのだ。

のぞみもそうなのだろうか。

ゆうべの、肩甲骨を覆っていた黒髪を思い浮かべる。どの明るみがやってきても、のぞみはつまらなさそうにあの黒髪をいじっているだけではないだろうか。そうして、鼻歌でも歌いながら乗客を値踏みしている。その割に視線は乾いていて、頭の中ではまったく別のことを考えているようにも見える。例えば、どこかのキオスクでほったらかしにされているかもしれない大空の写真集のこととか。さっきまでいたはずの棺おけのようなマンションのこととか。そのマンションでゆうべ、ともに暮らしていたはずの女を見送ったこととか……。いや、そうだろうか。エントランスの、あの重苦しい扉を抜け出ると、何もかもをすっかり忘れてしまうのではないか。まるで生き返ったみたいだ。

隣の車両から歩いてきた中年の男が、向かいの席に腰を下ろした。ハンチングを目深にかぶっているため、その表情はよくわからないが、さっそく目を閉じているようだ。青の綿のセーターが一度大きく波打って、深い息をしたことがわかる。私は彼よりも、彼の背後からはみ出てうしろの窓に張り付いている薄墨色の影を見つめていた。この車両に乗っている人の中で「数字の影」が見えるのは彼だけ

洋服、雑誌、ボードゲーム、音楽プレーヤー。私が彼女たちのために発注し、与え続けたものが、そっくりなくなっていた。そればかりか、足跡ひとつ、髪の毛一本、匂いの一筋にいたるまで、きれいに取り去っていた。自分を思い起こさせるものがないか、念入りに点検してから出ていったのだろうと思われた。感心するほど冷静なのだ。かねてから、こうしようあしようと段取りを決めていたかのようには抜かりがないのだ。私は勘が間違っていなかったことを知る。仕返しをされたような気持ちにもなる。判で押したように同じことが繰り返され、それゆえこの光景は、彼女たちのそれぞれの断片以上に私の心に強く残ってしまうのだ。

せつかく空っぽだったのに。私は残念でならない。どこでどう間違ったのだろう。けれども、どうやったとしても避けられないことのような気がする。

いやにすつきりとした部屋にひとり立って、やれやれ、と思う。それなのに、しばらく経つとまた次の女の子を探しに行ってしまうのだ。

機械的な声でアナウンスが流れ、これまでよりも多くの人が降りていく。風が吹きぬけたように一瞬静かになる。何駅目になるだろう。乗ってくる人は少ない。新しい乗客を確認し終えると、深く息をついた。

だ。

数字の影。これが見えることが、今の私を作り上げた。それは間違いのないことだった。これまでに、売り時を間違えて顧客の信頼を失ったり、大損をさせたり、はては他社のトレーダーに顧客を奪われたりする仲間を何人も見てきた。一度無能の烙印を押されたら、波動のように他の投資家たちにも噂が広まる。そうなるに次々と顧客は去っていく、しまいいにはこの業界にすらいられなくなってしまう。心機一転の転職なんてできない。烙印はどこまでもついて回るのだ。私は、影の意志に沿わないことの恐ろしさを思った。一方で、決して間違いを犯さずにどんどん売り上げを伸ばす私を、仲間はいぶかしい目で見えるようになってきた。あるいは秘密を探ろうと擦り寄ってくる。悪い気はしなかった。かといって、得意な気持ちにもならない。強いて言うなら、感情うんぬんはさておいて、ことさら堂々と振舞ってきた、ということになるだろう。ことさら。そのように振舞うことが自然なのか、不自然なことなのかはよくわからない。

電車の、うなり声のようなくぐもった発車音が聞こえた。そろそろと動き出す。始まりはいつもそうだ。それがいつそう変わったのかもさとりせないうちに、もう轟音をひびかせて暗闇の中を疾走している。私はただ身を任せるばかりだ。

のぞみ。

自ら私の部屋を出ていった初めての女の子。出会いからしてもこれまでの女の子とは違う。考えてみれば、選ばれたのは私の方だった。あのときもそろそろ街に出ようと思っていたのだった。

連れ帰ったその夜、パウチに入ったテールシチューを温めながら名前をたずねた。どこかにコートを脱いでしまいい、セーターに汚れたチノパン姿でうろろ歩き回っては、家具やオーディオや観葉植物などを珍しそうに眺めていた彼女は、やせっぽちの体を寒そうにすくめた。

「そうね……」

私の顔を見ながら、しきりに何か考えているようだった。

「……のぞみ。のぞみって呼んで」

私も少しだけ考えて、「いい名前ね」と言った。

彼女の名前を知りたくなったのはどうしてだろう。すいすいと、勇敢そうに、私の前を歩いて部屋に向かったからだろうか。リビングの窓からは、無数の街の明かりがつながらりまとまって、洪水のように押し寄せているのが見えるのだが、「へえ」と言っただけきりふいっと窓を離れ、まるでマージングでもしているようにリビングをうろつき始めたからだろうか。

「のぞみ」

呼びかけるわけでもなくつぶやいてみた。

「三ツ星シェフの味」と書かれた熱いパウチをちぎり、中身を皿に移し、テーブルに置いた。

のぞみは、さっそくテールシチューに取りかかった。スコップで砂場をほじくるようにあくせくスプーンを動かして、あまり嘔まずに飲み込む。赤黒いシチューの筋が口角から垂れ、それを手首にこすり付ける。セーターの袖は団子のように丸められていた。私は、この光景かもしれないと思っていた。この先大事に抱えていくことになる断片を、まっさきに探すことが癖になっていた。何度となく口元にこすりつけられる手首を見ながら、ソファにもたれ、のぞみ、ともう一度つぶやいた。

「で？」

しばらくしてテーブルから声が飛んできた。私はいつの間にか目を閉じていたらしい。

「で？」

意味がわからず、私はおうむ返しをした。テーブルに片肘をついたのぞみは、ダウンライトだけの薄暗い照明に照らされて、なかなかさまになって見えた。

「で、じゃないわよ。温かいもの食べたわ。ほら、すっかり食べちゃった。で、もう出ていった方がいい？」

そう言うと、思い出したように手首を舐めた。

私はソファから身を起こした。

「どうしたいの？」

「どうしたいもこうしたいも……」

のぞみは、小ばかにするように眉尻を下げた。

「私、ただできるものはありがたくいただくの。それだけ。」

それだけでここまで大きくなったのよ」

そう言って胸をのけぞらせる。いくつなのだろう。またたずねてみたくなる。年齢の割には薄っぺらく見えるその胸は、さつきまで着ていたコート以上にぶかぶかのセーターの下で、ずうずうしいほど落ち着いた息をしているようだった。

「つまり」

私は何か試されている気がした。

「私から提案させたいのね」

「別に。そんな難しそうなことじゃないけど。でも、ほかになんかいたただけるっていうなら……」

「部屋をあげるわ」

「……」

「好きに暮らしていい」

「……」

私はある期待を込めてのぞみの目を見つめた。けれどもその目は、口ほどに何かを欲している様子はなかった。瞬きもせず、窓を覗いたときとまったく同じ言い方で、「へえ」とだけ言うと、私からふいっと顔をそらせた。

「じゃ、それもいただくわ」

それから、あーあ、と豪快なあくびをしてテーブルに突っ伏した。伸ばした腕をワイパーのように動かして皿を押しつけ、上半身がテーブルを占領する。私は、肉付きの乏しい背中を見つめた。空っぽなのに、何かの重みに耐えているような背中だった。しばらくするとその背中が小刻みに震え始めた。思わず駆け寄った。そして、ひどく壊れやすいものを抱くように、腕曲に、慎重に、手を伸ばした。背骨か何かの突起が指先に触れた。思わぬ痛みを感じて、少し手を引いた。昔、同じぐらいに壊れやすいものを大事にしていたことがあったのではないか。ふいにそんなことを思った。やっかいなのに手放したくない、ひどく壊れやすいもの。

「ふふふふ」

何のことはない。のぞみは笑っていた。

頭がテーブルの上で反転し、垂れ下がった黒髪の間から私を見る。

「何だっけようだいなわよ。いいことだろうが悪いことだろうが、あげるって言うものは何だっけありがたくなかったってそれがどっちなかなんて、もううとときにはわからないじゃない？」

再び、どこかに痛みを感じた。

「もちろん、そうね……」

のぞみはこの晩、手に入れた部屋は使わずに、リビングのソファで寝てしまった。私は毛布を彼女の上に広げようとしたがやめて、自分の部屋に引き上げた。さっそく好きなように暮らしているのに、その邪魔をしてはならないと思ったのだ。

——何だってちょうだいするわよ。いいことだろうが悪いことだろうが……。

とっさに背筋を伸ばし、あたりを見回す。暗闇と轟音が隙間なくひしめき合うその真ん中を電車は突っ切っていく。延々とそれが繰り返されるばかりの車両に乗って、私は、私の中に潜んでいる黒い隙間に吸い込まれるような感じを覚えたのだ。それは、抗いたい眠気とでもいうものだったのだろう。そうして、のぞみと初めて出会ったあの晩のことを夢に見ていた。地下鉄に乗るのも久しぶりなら、地下鉄で居眠りをするなんて、まるで初めてのことのように意外な行為だ。

あいかわらず乗ってくる人は少ない。明るみをすぎるとつれ、重りを取つ払うみたいにしてから人影がなくなっていく。ハンチングの男もいつのまにか姿を消していた。本来の丸みをほぼ取り戻している七人掛けシートは、軽やかそうというよりは寂しげに見えた。

ふと、ある会話を思い出していた。Aとの会話だった。

ここ、とはいったいどこだったのだろう。ハイヤーでの通勤に慣れてしまった身では、想像すらできなかった。

わずかな明るみでさえ、まぶしい。

アナウンスが終点を告げている。車両に残っていた幾人かの乗客たちが、いっせいに身じまいを始める。私も髪をかきあげ、脇の手すりをつかんで降りるそぶりをする。

——何だってちょうだいするわよ。いいことだろうが悪いことだろうが……。

のぞみの声が頭の中に響いた。目を閉じた。軽いめまいを感じる。滑らかに電車は減速していく。

——だって、それがどっちかなんて、もうとうきにはわからないじゃない。

のぞみは決まりをちゃんと守った。つまり、我が物顔で部屋中を闊歩し、食べて、寝て、遊んで暮らした。私の帰りはあいかわらず遅かったが、起きていることもあれば寝ていることもあった。

ソファで寝ていることもよくあった。背もたれと座る部分が変わる隙間にぴっちり埋まって、うつぶせに寝ている。リビング中の何もかもに背中を向けて、すべてを拒絶しているようにも見えた。

「風邪ひくわよ」

ひとことふたこと声をかけたところで起きやしない。し

いつだったか、Aは、バッグの持ち手を握ったりさすったりしながら、電車での居眠りは不思議だ、というようにことを言った。彼女のほかのどの発言と同じく、特に興味を引く内容ではなかったはずなのに、私は、どうして？と聞き返していた。重大な秘密を打ち明けるようにあたりをうかがったAは、深いよ、とやかすれた声で言った。その大げさな身振りを見て、聞き返したことを後悔するほどの嫌悪をすでに感じていたのだが、深いよ、という言葉はなぜか心に残った。

深いよ、恐ろしく。奈落の底に引きずり込まれるくらい。そしてふっと存在感がなくなるの。そんな感覚、家のベッドでは味わったことがないわ。どうしてかしらね。それなのに、ここ、というところでバツと目が覚めるの。まるで目覚まし装置が体のどこかにあるみたい。私の意志ではないわ。

目覚まし装置ね。私はまた応じていた。

そうよ、目覚まし装置よ。もう私の体のどこかに組み込まれてしまっているのよ。許してくれないの、必ず起きなさいといけないの。たまに、これが壊れたらどうなるんだろうと思うわ。そうなると私は目覚めないのかしら。それとも、一生懸命這いずってでも目覚めようとするのかしら。あんなに深いところから……深くて、怖くて、どうしようもなく気持ちのいいところから……。

ようがなく放っておくのだが、ふいに背中に手を伸ばしてみたくなることもあった。そっと触れてみたとして、また思いがけない痛みを感じるのだろうか。そんな好奇心があった。

けれどものぞみの邪魔はしなかった。邪魔をしないというのは、この部屋での暮らしにおいて最優先されるべき礼儀のようなものだった。寝ているのぞみは、息をしているのかもわからない。ピクリとも動かない背中を振り返りつつ自分の部屋に引き上げる。昔大事にしていたような気がする、ひどく壊れやすいもののことを思い出せそうになりながら、気がついたら私も寝ているのだった。

朝になると、のぞみはソファから姿を消している。一度、でたらめな用事を作って彼女の部屋をノックしてみたことがある。返事がないので、ドアを少し開けて覗いてみると、白い羽根布団が肥えたさなぎのように丸まっていた。それもベッドの中央ではない。壁にびったりと寄りかかっている。羽根布団の中ですっぽり隠れてその姿は見えないが、ここでものぞみは、部屋中に背中を向けているのだと思われた。

「おかえりなさい」

起きているときは、玄関を開けたとたんどこからか声がかかるからすぐにわかる。ドアベルのような律儀さで、私の帰りを待っていたかのように声がかかるのだ。気が向

いたときには、そばにもやってくる。

のぞみは、何を着てもぶかぶかになってしまふ。与えた服ばかりでなく、私の服を着ていることもあった。あるときはニットジャージーのグレーのワンピースを着ていた。どこから引っぱり出したのか、存在すら忘れていた服だった。ミニ丈のはずだったが、膝小僧が見え隠れするくらいになって、胸元もだらしなくたるんでいる。少し肩をすくめただけで、すとんと脱げ落ちてしまふようなのだ。た。

「ねえ」

話したいことがあるようなのに、もったいぶってなかなか近づいてこない。服とのぞみの顔を交互に見る私の様子がおかしかつたらしい。目をばちばちさせて、わざと視線をそらそうとしている。

「何？」

私はふと、あれはずっと幼い頃のことではなかっただろうか、なと思っていた。やっかいなのに手放したくない、ひどく壊れやすいものを確かに私は大事にしていた。

「おねえさんにだけは聞かせてあげるわ」

そう言うのとすたすたと歩き、ソファの前のガラステーブルに腰掛けた。ワンピースの下から伸びた素足が、びゅつと音を立てそうな勢いで動いたかと思うと、くねるようにして足を組んだ。ずいぶん大人っぽい所作に見えた。むき

だしの膝小僧には三日月の形をした傷痕があった。

「何かしら？」

私はアタッシェケースを床に下ろし、椅子に腰掛けた。「私、お父さんがいないのよ。いるんだけどいいの。何て言うんだっけ、こういうの」

私は黙っていた。

「父なし子。違うわ。そんな古臭い言い方じゃなくて……」

「私生児？」

「そう。それ。私生児」

のぞみは目を細め、うつとりとしたまなざしで何回か私生児、とつぶやいた。

「つまり、愛人の子ってわけ。父親っていうのはちょっとした有名人なのよね」

私はテーブルに頬杖をついて、瞬きを相槌代わりに聞いた。それというのも、この話は何回か聞いている話なのだった。私生児という言葉のをぞみはすぐに忘れてしまう。そして話すたびに父親は俳優になったり画家になったり政治家になったりする。

「学者なのよ。難しい本をいっぱい書いてそれはそれは偉い人なの」

ここで必ず一呼吸おく。指先を見つめることだったり、ため息をつくことだったりする。

「オカアサンはけっこう優雅に暮らしているのよ。海辺の一軒家を与えられて。私はピアノとバイオリンを習ったり、バレエまでいかされたりで大変だったの。今から思えばそんなオカアサンに反発したのね」

私は何も返事をしない。貧相な体ののぞみが、バイオリンを肩と顎の間に挟んだり、チュチュを着ている様子をただ思い浮かべるばかりだ。「オカアサン」と言うときにはいつも覚えたての言葉を使うようなぎこちなさがあったが、それについても何もたずねないでいた。私がたずねたのは名前だけだった。

あの匂いを偶然嗅いだのは、のぞみと暮らし始めて二ヶ月も経った頃だろうか。

のぞみは私の部屋で何不自由なく暮らすようになってからも、栄養が足りないような体のままで、手や足は垢じみていた。しょっちゅう体のどこかに手をやり、さすったりかいたりしていた。そうでもしないと自分の存在がわからないとも言いたげに、天井や壁や床や家具のある一点をじっと見つめながら、せわしなく手を使う。

あのときは首を痒そうにかいていた。

休みの日で、久しぶりにくつろいで夕食を食べた。だからといって一緒に食べたわけではない。私はテーブルで、本棚に眠っていた文庫版の「パンセ」を読みながら、スモ

ークサーモンを挟んだクロワッサンとキャベツのスープを食べた。それを食べたかったわけではなくて、キッチン棚の先頭に置かれていたパウチの袋がそれだった。何も考えずに目に付いたものを温めるだけだから、まるで朝食のような取り合わせになってしまふことがよくあった。これは朝食べるべきもの、それは夜食べるべきもの、などと注意することはかなり前からやめていた。のぞみはソファで何か袋に入ったものをクシャクシャと音を立てながら食べた。のぞみもまた、いつ何を食べるべきかなどと考えるタイプではなかった。そしてそのまま手も拭かずに、難儀そうに腕を首に回してかき始めたのだ。

食事のあと体をかいてはいけない、などとは思わない。けれども、くつろいだ気分がいつもの調子を崩した。注意してみたらどうなるだろう、と思ったのだ。のぞみから、大事な癖を取り上げたらどうなるだろう。私は「パンセ」をテーブルに伏せ、立ち上がった。

「痕になるわよ」

恐ろしい宣告をするように、眉毛を吊り上げて見せた。「あなた、そこらへんにたくさん痕があるじゃない。しょっちゅうかくからそうなるのよ。何かできているのなら、かかずに薬を塗った方がいいわ」

のぞみは手を止め、黙って私を見上げた。不満そうにも見えたが、私がソファに近づくとひとり分体をずらした。

私は空いたスペースに腰掛けた。

「ほら、見せてみなさい」

「ここ？」

私にたずねるように言うと、頭の向きを変えて髪をかき分けた。首の付け根のあたりにやや赤くなったところが見えた。

「ああ、やっぱり何かできているわ」

吸い寄せられるように覗き込んだ。

「くすぐったい」

のぞみは肩をよじらせた。

そのときだ。あの匂いがふいに飛び込んできた。蒸れたトロピカルフルーツのような、野蛮で、それでいてひどく懐かしい、平和な匂い。しばらく動けなくなった。どこかで同じような匂いを嗅いだ気がした。私の頭がまた遠いところへ向かい始めた。

小学校にもあがっていないぐらい幼かった頃のことだ。

ふざけて母親のスカートに潜り込んだ。母親が夏によく履いていた、白くて、青いヨットの柄がいくつも並んでいたスカート。母親は、光にあふれた台所で洗い物をしていた。こら、やめなさい。鼻先で笑いながら言う。片足を浮かせて、蚊を追い払うように踵を振る。どれもが甘噛みされたほどの効果しかなく、私はますます深く潜り込む。桶の中で食器と食器とがこすれ合う音。流水がステンレスにぶつ

るようになった。

「嗅いでいい？」

いてもたってもいられず、一日に何度も求めることもあった。

「いいわよ」

のぞみは、テレビを観ている、雑誌をめくっている、アイスクリームにかぶりついている、どこで何をしている、さっとそれらをやめて、どこか誇らしげな顔つきになって私の隣にやってくる。もう余計なこととは言わない。黙ったまま髪をかき分けて細い首筋をさっと私に向けて。彼女は、このことに関しても律儀だった。

私は、そんなのぞみにしがみついた。華奢な肩をぎゅっと掴んで、鼻先を首に押し当てる。目をつぶる。深く、体中に行き渡らせるほど長く吸い込む。蒸れたトロピカルフルーツのような、野蛮で、それでいてひどく懐かしい、平和な匂いを。

「日に日に体が軽くなるみたい」

のぞみは、私の体が首筋から離れたときに、肩を回しながらそんなことを言ったりもする。

「おねえさんがこの匂いを嗅ぐから？ それとも、こんな、空に浮かんだ箱みたいなところで暮らしてるから？」

答えは求めている。

「ま、どっちでもいいし、どっちでなくてもいいわ」

かりはせる音。私は笑いながら伸び上がる。そして太ももが頬に触れ、行き止まりに頭がつつかえたとき、思い切り吸い込んだのが、そう、この匂いだった。一瞬すべての音が消えた。生温かい母親の体温そのもののような匂い。

二、三回、大きく息を吸い込んだ。ややあつてのぞみは振り返った。

「葉、塗らないの？」

のぞみはこころなしか目を輝かせていたように思う。それからまくしたてた。何ができてた？ ひどいできもの？ そんなに痒くはなかったんだけど。虫刺されかなあ。でもこんな所刺された覚えはないわ。それに、この部屋の中に、何か生きているものがあると思う？

私は、頭の中の嗅覚につながる部分がなにか痺れたようになりながら、返事の代わりにそっとのぞみの首をさすった。

「大丈夫よ」

そう言った。のぞみは口をつぐんだ。

「大丈夫」

もう一度言うのと、探るように動きを止めていたその顔に、やややわと笑みが広がった。ちょっととした善行を見られた人が浮かべるような、中心から広がる、淡い笑みだった。

それからだ。私は、たびたびのぞみの首筋の匂いを求め

関心のなさの表れのようにも照れ隠しのようにも見える大きな伸びをして、ソファに吸い込まれていくのだ。

のぞみを見るたびに連想されてならなかった、昔大事にしていたはずのひどく壊れやすいもの。それが何であったのか。私は、もう少しで思い出せようになりながら、結局は思い出せないでいた。そしてこの頃では、もう二度と思い出せないだろうと思うようになっていた。そのやっかいさに負けて、きつとつづくの昔に手放してしまったのだ。手放してしまったことさえ忘れていた。そんなもの思い出せるわけがない。さばさばした気持ちでそう思った。さばさばしていたし、悔やんだりもしていなかった。つまり、それに代わるものを手に入れた気がしていたのだ。

のぞみの首筋の匂い。この匂いを嗅ぐと私は安らいだ。嗅いでいい？ こうお願いするときに、わずかに恥ずかしさを感じないわけでもなかったが、それは、ただ嗅ぎたいということ以外に、嗅ぐことの原因がないからだろうと思われた。

恥ずかしさは、嗅いだ瞬間に消えた。というのも、嗅いだ瞬間にいろいろなことが浮かび上がるからだだった。めくるめくという具合に、乳白色の光に包まれた台所や、頬に感じた太ももの質量や、ヨット柄が浮かび上がり、そればかりか、初めて行った動物園のゲートが色とりどりの風船で飾られていたことや、ある日の百貨店で食べたお子様ラ

ンチの旗が日の丸だったこと、そのとき父親がカツ丼を食べていたことなども呼びさまされるのだった。それらはすべて安らぎの元となった。地に足が着いているような気分にもなった。うまきは言えないが、この匂いを嗅ぐと私は、おそらく、生きていくという感じになるのだった。

降り立ったのは、見知らぬホームだった。

ターミナルなのか、アーチ型の天井に押しつぶされそうになりながらも、思いのほか広々とした空間が広がり、何本ものホームが並んでいた。じっとしている人もいれば、走って階段に向かったり、電光掲示板を見上げながら歩いたり、足早にホームのどこかを目指している人もいる。それぞれのホームにいるそれぞれの人々は、遠近感をもって重なり合い、うごめいていて、それなりの人数がいるようにも見える。

もしかしたら、どこかにまぎれているのではないか。

一番手前のホームにたまたまの私は、懸命に目を凝らした。まぶたの裏がうずく。何回も瞬きしないと開けていられない。

ちっ。舌打ちが聞える。ちようど今いるホームに電車が入ってくるころだった。偶然私は階段のふもとをふさぐように立っていた。ちっ。ちっ。ちっ。階段を駆け下りてくる何人もの男や女に小さき舌打ちを浴びせられ

ているようだ。

轟音とともにやってきた風で、髪の毛が巻き上げられる。あつという間に視界が電車でふさがった。

「ああつ、もう」

頭を抱えて叫んだ。舌打ちの代わりに興味深そうな視線が投げかけられる。

「見えない……見えないじゃない」

扉が開く。またどこからか舌打ちが聞え、肩が誰かにこすられて体が斜めに傾く。そこをまた別の誰かに手で押しやられる。はずみでハイヒールが片方脱げる。閉まりかけの扉に何人も飲み込まれていった。ページユのハイヒールは何本もの足に蹴飛ばされ、どんどん遠くへ運ばれていく。はじかれた私は、よろめいてホームに手をついた。

顔を上げたとき、まさに電車は出発しようとしていたのだが、その扉の向こうのどこかで、ずるそうに光る目を見た気がした。

「のぞみ……」

姿形を見たわけではない。

初めて出会ったあのととき。ぶかぶかのコートの襟を片手で掻き合わせたあのととき。大空の写真集を投げ捨て、私のマンションへ足を向けたあのととき。あのとときと同じ目が、人ごみの車内のどこかにあったような気がしたのだ。

「のぞみ！ のぞみ！」

立ち上がるのも忘れて叫んだ。

電車はゆっくりと、うなり声とともに動き出す。

「のぞみ！」

ようやく立ち上がったときには、もう轟音へと変わっていた。伸ばした私の手をかすめることもなく電車は走り去っていく。

——あなたもふたりぐらい産んでみればわかるわよ。

いつかこのセリフを言い放ったAは、そのあとこう続けたのだった。機嫌よさそうに笑いながら。

——猫を飼うのとはわけが違うんだから。

すでに、Aの背後には上へと伸びる影があった。初めは一過性のものだろうと思っていた。仕事仲間の背後に現れる「数字の影」は、長くは続かない。株価に影響を与えそうな情報に常に触れている以上、数字に操られてはいけなかった。優秀な人材であればあるほど、高い倫理観や責任感をもって、知らず知らずのうちに我が身に芽生える「数字の影」を、これもまた知らず知らずのうちに封じ込めてしまう。

けれども、Aの影は消えなかった。日に日に濃くなって、とうとう墨をぶちまけたように濃密な黒となり、形もいびつになった。無数のとげを形作るようになったのだ。まるで巨大なウニを背負っているみたいだった。化け物に操ら

れるようにして、私に話しかけてくる。毒にも薬にもならない、どうでもいい話。今晚の夕食の話。子供の成績の話。私が飼っているという猫の話。ごくわずかに仕事の話。そして、バッグの持ち手を握りなおす落ち着かない手の動き。

私は、誰かの背に「数字の影」が見えたとしても、それをどうにかしようとは思わない。どうにかしなかったからといって、誰に責められるものでもないし、そもそも、そんな妙な影が私に見えることを誰も知らないのだ。けれど、Aが影を背負っているということを私だけしか知らないということは、なぜだか私を息苦しくさせた。Aへの愛着のためだろうか。いや、そんなわけはなかった。どちらかというと、私はAをうとましく思っている。同じ性別、同じ世代、同じ職業でありながら、まったく共通するところのない部屋へ帰っていくAを、どこかで落伍者だと思っている。

それなのに、あわただしく話し終え、バッグを抱えて、凶悪そうな影に付きまといながら去っていく彼女を、手を伸ばして呼び止めてしまいたいようになる。そうして考えてみる。いったいAに何が起きているのだろうか？ 無能とまでは言えないぎりぎりの仕事ぶり、平凡な日常をそれは見事に守り抜いているAに、いったい何が？ 少なくとも、「数字の影」が住み着くような背中ではなかった。彼女の背中には、稼ぎのあまりよくない夫と、生意気盛りの

ふたりの息子が常に見え隠れしていたのではなかったか。宙に浮いた自分の手を別の生き物のようにしげしげと眺めながら、Aに起こってしまったことを考えてみようとするものの、私には想像すらできないのだった。過去に似たような例があったではないか、と思い当たってしまうだけだった。ずいぶん見てきたはずのよく似た例のひとつにすぎないのではないか。そこで完全に思考は止まる。そして、ハイヤーから眺める無意味に崩れた景色の中にふいに放り込まれたような感じになる。あれは、眺めるだけだからいいのだ。ますます息苦しくなり、そんな私の鼻先は、水面を目指して一生懸命上昇するように、あの匂いを求めるのだった。のぞみの首筋の、あの匂い。

いつからか玄関のドアを開けるたびに、まるで部屋が溜め込んでいる澱のような、重い空気存在を感じるようになっていた。ねっとりとした空気が廊下の奥から這うように押し寄せてきて、私にからみつく、ドアから外へ抜けていく。それは、のぞみの気配そのものであるような気がしていた。ちらかしたいただけ部屋をちらかして、好きなように暮らしているのぞみの、内側に充満しているもの。

——日に日に体が軽くなるみたい。
吐き出した分は軽くなっているのか。それとも、吐き出してはまた補填されていくのか。本当のところはわからない。

なったあの匂いが顔を覆う。私は夢中で吸った。鼻先を首筋に押し当て、深く吸った。吸い続けた。手は濡れた髪へと向かった。指に髪の毛の束をからませて、ほぐしながら撫でて、また吸った。

手は髪の毛を離れ、首筋を通り過ぎ、背中へと向かった。背中を包み込むように腕を回した。そうして私の上半身を重ねた。胸が肋骨らしきとがった形を探りあてる。やや強く抱き寄せた。のぞみはソファからほんの少しはがされた。それでも起きてはいないようだった。背中の前後の動きが、わずかながら感じられる。

鼻先はのぞみの首筋に押し当てたままだった。あの匂いが私のすみずみに行き渡り、あふれて繭のように体を覆う。

あなたを通して、私も息をしているわ。

そう言ったような気がする。

いつの間にか私は眠ってしまったようだった。夢を見ていたのだろうか。私は髪を撫でられていた。いつまでもこうしていますよと、安心させるような優しい手つきだった。母親の手だろうか、と思った。それとも父親のだろうか。

こんな歳になっても髪を撫でられる覚えがあるのがそのふたりだけだなんて。しかもずいぶん幼い頃の経験でしかないのに。夢を見ながらそんなことを思い、苦笑していた。いい夢だとは言いがたい。それでも、撫でるその手が止まらないようにと私は祈った。優しい手は忍耐強く動き続けた。

い。

真っ暗の中、その日ものぞみはソファで寝ていた。いつものように部屋中に背中を向け、ソファの割れ目にびっちり収まっているらしかった。ソファの横に置いてあるルームランプに明かりをともし、シェードの向きを調整してのぞみを照らし出した。闇に浮かび上がると、ますますちっぽけな背中なのだった。

私は、Aが背負っている影を思いながら、のぞみの背中を見つめた。

空っぽなのに、何かの重みに耐えているような。のぞみの背中への印象は、ずっと変わらないでいた。けれども新しい発見があった。まったく動かないようであったのぞみの背中が、かすかに前後に動いているのだ。息をしている。当たり前の発見だったが、のぞみが何かをさらけ出しているような感じもした。無防備。浮かんだのはその言葉だった。無防備を私の前にさらけ出している。それは、拒絶と同時に存在する受容だった。そこにのぞみの悲しさがあるような気がした。ふいに息苦しさに耐えられなくなった。膝を折って屈むと、少々びくつきながら、のぞみの髪をかき分けた。髪は濡れて冷えていた。首がむき出しになった。薄い明かりのせい、セルロイドのように血の気がなく、滑らかで、美しく見えた。鼻先をそろそろと近づけた。額にのぞみの髪が触れた。それだけで、いつもより湿っぽく

親指の付け根が母親のほど厚くないようだった。やはり父親の手だろうか。けれども父親は、こんなにも長く撫で続けてくれただろうか。

目を覚ますと、もう朝だった。私はソファにひとりきりだった。夕暮れ時とそっくりな色に街は染まっていて、おこぼれの茜色が部屋に入り込んでいた。のろろと起き上がり、背もたれに抱きついて頭がすっきりするのを待った。街は徐々に白っぽく鮮明になっていく。背を伸ばし放題の建物たちが、再びでたらめなチャートをなしていく。

だんだんと明るくなるといのは、私までもが丸裸になつていくようで、恥ずかしいというよりも心細かった。ふと、静かすぎるのではないかと思った。女の子たちが出ていったあとの、すがすがしいほどの静けさがよみがえった。グシャリ。ふいに、かたつむりを踏み潰したときのような音が体の中から聞こえ、次の瞬間にはもうのぞみの部屋へ走り出していた。言い訳も何も用意せず、いきなりドアを開けた。

ベッドの上には丸まった羽根布団があった。

ドアノブを握り締めた手から力が抜けた。いつものとおりものぞみはそこにいる。壁にびったり寄りかかっているのもいつものとおりだった。カーテンを開け放した窓が白く輝いて、白い羽根布団も同じように輝いていた。

結局のところ、のぞみは変わらなかった。私に首筋の匂いを提供するようになって、またその匂いを私がこっそり嗅ぐことも、朝に部屋のドアを乱暴に開けようとも、何事もなかった顔をして好きなように暮らしているように見えた。

「ご飯も作らない。掃除もしない。何も飾らない。心配もしなければ、期待も見せない。窓の向こうの景色には興味がなく、眠るときは部屋中に背を向けるし、起きているときは体のどこかに手をやっていた。気が向けば話しかけにくるのも変わらなかった。」

そのことは、この生活がそのまま続くのではないかという考えを生んだ。一瞬でもその考えが頭に浮かぶと、慢性の神経痛のように長く体のどこかを刺激した。それゆえ、痛いのかかゆいのか、不快なのか快いのか、自分でもよくわからなくなってくるのだった。こんな考えが浮かんで、こんな気持ちになることは、これまでの女の子との間ではなかったことだった。

はつきりしていることもあった。休みの日に思い思いに夕食をとるひとときは、いつでも私をくつろいだ気分させるということ。のぞみが見当たらないとなると、断りもなしに部屋のドアを開けてしまうだろうということ。ねつとりとからめとられるようなのぞみの気配を、ドアを開ける前から期待しているということ。

からなかった。

のぞみは、顔は私に向けたまま、体を右に左にねじってみせる。

「ずいぶん古そうな服よね。それに、こう言っちゃ何だけど、そんなにいい服じゃないわ。ほら、裾がちよっとほつれてるし、表面もテカテカ光ってる。タグも真っ白になっちゃって、どんな素材なのかもわかんない。今のおねえさんとはかけ離れすぎてるわ。でもね、これを着ているおねえさんを思い浮かべることができたよ。まったく想像できないっていうわけじゃなかった。きつとできそこないで、誰かのスネかじって、ちよっとおどおどしてて……ほら、こんな感じ」

のぞみは猫背になって顔を前に突き出し、上目遣いになると、両足は交差させて、ぐらぐら揺れだした。のぞみの想像では、その頃の私は少し頭が足りない風だった。ふふふふふ。のぞみは、おかしそうに鼻にかかった笑い声を漏らした。

「どう？」

裾から膝小僧が見え隠れして、やはり三日月形の傷跡がそこにはあった。むき出しの肩に覆いかぶさった黒髪。華奢で垢じみた手足。反応をうかがうような目つき。

「あなたは……」

そこまですると、急に頭が回るような感じがした。額に

あの晩も、ドアを開けると期待どおりの気配があった。

「ねえ」

おかえりなさい、の声のあと、のぞみはリビングのドアの向こうから顔だけ出した。

「何？」

「こんな服、見つけたの」

目をぱちぱちさせるだけで、リビングに入ってこようとしなない。

「何？ どんな服？」

そう答えた私ものぞみから目を離し、アタッシェケースをテーブルに置くと、中の書類を確認し始めた。できれば部屋に仕事を持ち込みたくないが、うまくいかないときもある。徹夜でデータの分析をしようと思っていた。

ふと顔を上げた。

「見て」

音もたてず目の前にやってきていたのぞみはそう言った。紺色のタータンチェックのジャンパースカート。のぞみは素肌にならなければ着ていた。

「それ……」

ずいぶんくたびれたその服は、大学進学を機に実家を離れたその日、着ていたものだった。一枚きりの一張羅。これさえ着ていれば、どこにだって行けると思っていた。

とつくに処分したはずではなかったか。次の言葉が見つ

手をやる。

「……そっくりよ。私にそっくり」

のぞみは黙って目を大きくした。

「こんなに似ているなんて思いもしなかった」

「……そう？ 全然似てないわ。全然違うじゃない」

「いいえ、似ているのよ」

のぞみはぶすつとして頬を膨らませたが、私を見つめたままだった。奥の方がらんと輝いて、何をお願いしてもかえてくれそうな、よく懐いた獣のような目に見えた。

「よく、わかんない」

「わからなくていいのよ」

しばらく私は額に手をやったままだったが、ため息のように、嗅いでいい？ とつぶやいた。どうしてだか、ひと仕事終えたような倦怠感があった。けれども安らいでもいた。さらに安らぎたかった。そして、安らぐための正当な理由をやっと得たような思いもしていた。

いいわよ。のぞみの目の奥が一層輝いた。そして素早くうしろを向き、髪をかき分けた。ジャンパースカートのファスナーが、あと一步のところまで閉まりきらず、黒髪を一筋噛んでいた。

Aが会社に来なくなった。

そのことを誰も口にはしない。誰もが普段と変わりなく、

焦ったり落ち着いたり頭を抱えたり目を見開いたりしながらパソコンを操作し、受話器を握り締めては唾を飛ばしたり頭を下げたりしていた。昼食を交えたミーティングもおこなった。そこでの話も普段と変わりがなかった。

「猫ちゃんの写真、まだですか？」

約束した覚えはないが、そんなふうに催促されたりもした。

「そんなことより、午後の取引で注意してもらいたいことがあるのよ」

私も普段どおりだった。

表だって変わったことといえば、Aのデスクがなくなっていたことだった。デスクの両脇に置かれていたはずの二対の仕切り板が重ねられていた。そんなところに机なんてなかったよと言われればそんな気もする頼りのない記憶だったが、床には日焼けを免れた跡があった。その跡は、ちょうどデスクの脚の形と一致するので、それによって確かにそこに机があったのだとわかった。私は、影を背負ったAをもう見なくて済むことにほっとした。

Aのことを誰も何も触れない。それは、Aなんてまるで存在しなかったかのようでもあり、Aが何かとんでもないことをしてかしてしまっただけのようでもあった。誰も何も知らないのは確かだろうが、何かが起こったことだけはわかっているのだ。

線も光もごちゃまぜになったまるで意味のない景色の中に放り込まれてしまったのだ。

昨夜専務から呼び出されたときは、またいつもの話か、としか思わなかった。実際、いい加減飽き飽きしてきた内容を順番通りに進んだだけだった。何台ものパソコン。眠らない世界のマーケット。汗をかいたグラスにあの手つき。そして、利益を得続ける私の顧客についてのあれこれ。

「君の優秀さ、負け知らずには頭が下がるよ」

グラスを持ち上げた専務は、飲まずに空中でもグラスをひねくり回していた。

「君だけは失いたくないな」

「恐れ入ります」

答えた声には、思いのほか感情がこもらなかった。

「まあ、君さえいてくれたら、このたびの損失なんてあっという間に取り返すさ。一晩ですべてがひっくり返るんだ」とAのしでかしたことでしようか？ 思わず口をはさみそうになったが黙っていた。

専務は、何やらつぶやきながら手元の紙にゼロを書き始めた。……千、万、億、十億、百億、千億……。見てごらん、ゼロの見事な羅列だ。こんなに多くのゼロ、実際に見たことがあるかい？ ん？ 変な日本語だな。まあいい。こいつらが……ゼロの果てしない積み重なりが、先頭に適当な数字をくっつけて、寝る間も惜しんでこの向こうを飛び交

青白い顔をした見慣れない中年の男が専務の部屋から出てくるのを見た。おどおどして、視線も定まらず、壁に手をつきながらふらふらと事務所を出ていった。誰にも何にもわずかな影響も与えそうにない貧弱な背中だった。言いようのない不安……感じられたのは、ただそれだけだった。Aの夫だろうと思った。Aの行方を捜しているのに違いなかった。私は、あの夫とAが行ったという小さな島のことを思い浮かべた。Aを名前で呼ぶというふたりの息子についても、会ったこともないのに顔が浮かぶようだった。少し息苦しくなった。

この不審な中年の男のことは、見かけた社員が何人かいたようで、Aに関する噂がぼつりぼつりとたち始めるきっかけになった。会社の資金を何億も持ち逃げした……調査部門の社員と不倫関係になったあげくインサイダー情報を聞き出し、それをえさに顧客から資金を得ようとした……ありもしない上場情報を流して詐欺を働き、裏社会から追われている……どれも出所のわからない不確かな噂ばかりだった。確かなのは、Aがいかにお金を欲していたかということだった。その理由はまるでわからないし、わかるうとするそのものがナンセンスなのだと、社員の誰もが思っているはずだった。

とにかく飲み込まれてしまったのだ。私は思った。Aは、あのとげとげの、ウニの化け物のような影に飲み込まれ、

っているんだ……。独り言のようでもあった。ペンで示した先にはパソコンがあった。

「あるのかないのか、わからない世界ですよね」

私はすでに別のことを考えていた。のぞみのことだった。部屋を出てくる前に、廊下を小走りで玄関へ向かったとき、目の端にのぞみが映った。

「行ってらっしゃい」

そう声をかけられ振り返ると、肩甲骨を覆い隠した髪から透明なしずくが滴り落ち、バスタオルをかすめた。のぞみは背を向けたままで、こちらを見ることはなかった。それでもわずかの間立ち止まっていた。そして右手を上げてひらひらさせると、静かにリビングに消えていった。廊下には点々と光るものが残された。髪の毛のしずくだった。しばらくそのしずくを眺めていた。のぞみの無防備をまたひとつ見たような思いがした。同じくらい、私ものぞみに無防備をさらけ出しているのだろうかと思った。

珍しく酔っている専務の前に、ぼんやりとそのことを考えていた。そうするうちに、あるかたちが宙に漂い始めた。滑稽であり、切実であり、どことなく不安定な私たち。のぞみの華奢な肩にしがみつき、夢中になって首筋に鼻先を押し付ける私のかたち。

今朝、あのねっとりとした、のぞみの気配のような空気

にからめ取られながらハイヒールを脱ぐと、まずはリビングに向かった。椅子に腰掛けて、お菓子の袋や雑誌や、わけのわからないシールやらでちらかったテーブルを眺めていた。しばらくして、テーブルの下にとぐろを巻いた布があるの気がついた。何気なく持ち上げると、私の古いスウェットだった。最近ののぞみは、これをパジャマにしている。視線の先のソファに、変な模様ができているのにも気がついた。近づいてみると、それは、思い思いの方向を向いている対の黒い靴下だった。かすかに体温が残されているようだった。バスタオルがソファの足元に落ちていた。ゆうべのとは違うバスタオルだった。さつき使ったみたいにして湿っていて、黒い髪の毛が何本か巻きついている。

拾い上げたバスタオルを握り締めたまま、慌てて方向転換をすると、のぞみの部屋へ走った。

羽根布団は丸まっていた。けれども、かさがやや減っているようだった。

わざと大きな音をたて、部屋に足を踏み入れた。待っていたのは羽根布団の空洞だった。バスタオルが手から滑り落ちた。呆然と黒い空洞を見つめた。実際、見つめたままでも時間でもたたずんでいられそうだった。窓は白く輝いていたが、羽根布団にはもう輝きはない。つやもふくらみもなく、ただの抜け殻なのだった。

会社に電話しなければ、と思った。

何回か弾んで灰色のホームを線路の方に転がると、手品みたいに一瞬で消えた。

私はそれをどうすることもできなくて、その最期を確認することもしなかった。のぞみの光る目を乗せた電車が轢き潰していったはずだった。立ち上がると体が斜めになった。足にはめたままのハイヒールを脱いだ。両足の裏にはざらざらした感触がなくて、頭の先までホームの灰色に染まってしまうような気がした。手に取ったハイヒールを次にホームに入ってくる電車に投げつけようと思ったが、そろそろ減速しながら決められたとおりに停車する電車を見ると、振りかぶった腕もびたりと止まってしまった。

目の前で扉が開く。手にハイヒールをぶら下げたまま、素足で乗り込んだ。

どこをどう運ばれているのかわからないのはあいかわらずだった。片方のハイヒールを胸に抱いて、素足を揃えてシートにもたれた。

乗客は徐々に増えていく。何回か人の流れにつられて乗り換えをした。かと思えば、急ぎ足の人々に取り残されて、ホームのベンチでじっとしていたりもした。それでも飽きることなく目の前に電車はやってくる。乗り込む。乗り換える。見送る。そしてまた乗り込む。この一日で、多くの人を見た。誰もがどこかに帰る場所があるのが信じられない

いつか、猫のえさをくれた女性が出た。

「のぞみがいなくなったの」

何と云うのがいいだろう、などとは考えなかった。

怪訝そうな間があり、あっ……、と小さく聞こえた。

「大丈夫ですか？ お昼でよければ私も探しに行きましようか？」

たちまち切羽詰まった声になる。

「猫ちゃんですよ？ 心配ですよ？ どこ行っちゃったんでしょ？ 心当たりがあるならぜひ私も一緒に——」

私は黙って電話を切った。

床の上におちまけられていたポテトチップスを踏みつけ、棚から半分飛び出していた額縁に腰を打ちつけ、なぜか廊下で転がっていたドライヤーにつまづいた。廊下にはゆうべのしずくが染みになって残っていた。指先で染みをなぞった。白く粉をふいたようになっていたが、指先には何もつかず、鼻に近づけても何も匂わなかった。ここでも、何時間でもそうしていられそうだった。はっとして立ち上がり、のぞみの気配をかき分けるようにして部屋を出た。そうしてエントランスの頑丈な扉を開け、表通りに立ったのだった。

脱げたハイヒールはホームの向こうに消えていった。

ページュの、少し変わったおもちやのように、軽やかに

かった。

Aの姿を見たような気もした。乗り換えた先の車内やホームの向かいを歩き違えていく電車のどこかに、影そのもののようにうつむいて座っていたような。または、ドアへなだれ込んでいく人の流れにまぎれて塵のように車内に消えていったような。確かにAだったような……。そうでなければ、Aにとってもよく似た誰かだったのか。

——深いよ。

実際、Aはそう言っていたではないか。

——深くて、怖くて、どうしようもなく気持ちのいい……。深い眠りの中に落ちていく。

ときおり、電車の軋む音が人の声のように聞こえるのはどうしてだろう。うっかりしていると、Aのからみつくような叫び声に聞こえて耳をふさぎたくなるし、のぞみの高く細い笑い声のように聞こえるときには、思わず立ち上がってしまう。けれどもすぐに別の音にかき消されてしまうのだ。

決して眠りきることでできない情念……。それは、ふとしたはずみに、軋みに乗じて表に出てくるしぶとい情念だ。ひよっとして出口を求めているのかもしれない。暗闇と轟音に埋めつくされたこの地下鉄の、どこかにあるのかもしれないかすかな出口。そんな出口があるとして、私は、その出口に向かって何をどう嘆いたらいいのかわからなくな

りつつある。

Aの叫び声がまた聞こえた。妙に生々しく、私が叫んだかのような違和感を喉に残した。そしてある衝撃を感じた。それは、ある衝撃というほかはなく、確かに私の体を大きく揺さぶった。

電車は、どこかのホームを減速しながら通りすぎようとしていた。停まりそうなほどの減速ぶりだった。ほかの乗客を見渡すと、私のように体を揺さぶられたような様子はなかった。ただし、それ以上の異変があった。シートに腰掛けている乗客たちは、一様に、体をひねったり伸ばしたりして一方の窓の外を見ようとしている。立っている乗客たちも、同じ方向の窓やドアに吸い寄せられている。ホームのどこかで何かが起きているようだった。あちこちで話し声が聞こえ、すぐにまとまったざわめきになった。反対側のシートに腰掛けていた私は、素足で立ち上がった。けれども、乗客たちの背や頭に阻まれてよく見えない。ハイヒールをはめてみたが、片方はめたところで視界は何も変わらないのだった。ようやく人の切れ目から見ることができたのは、ホームの向こうに電車が停まったまゝになっていて、先頭車両に何人もの人が群がっている様子だった。線路を覗き込む頭、頭、頭。ホームに放り出された白いタンカ。警棒を振りかざしている警官。それらの光景を煙に巻くように、私を乗せた電車はホームをゆっくりとあとに

し、再び暗闇と轟音の中に進んでいく。

車内のざわめきは収まらなかつた。誰もが、元の姿勢に戻りつつもそれぞれ操作し始め、やがて小さな悲鳴を漏らしたりしている。

「ちよつと見せてくれる？」

私は、向かいのシートの乗客が握り締めている小さな液晶画面を覗いた。男か女か、若いのかそうでないのか、まるで気にせずつい近づいたが、その人物は案外好意的に画面を私に向けた。見やすいように角度まで気にして。

「……」

いやな世の中だよね。まさかと思って検索したけど、何もかんでも実況中継だよ。いやあ、晩飯食べたあとでよかったよ……。年老いた男だった。私はあいまいに会釈して、シートに戻った。あれ？ お姉さん、片方の靴どうしたの？

何も答えなかつた。

学生だった頃、帰省のために乗っていた特急電車が鹿をはねたことが思い出された。まるで自分自身が分厚い壁にでもぶつかったように、勢いよく背もたれに叩きつけられたのだった。鹿一頭分の命の衝撃だったことを知らされたとき、ふと感じたのは恐ろしさや哀れみではなく虚しさだった。驚きとともに体に刻み込んだはずの衝撃を私はすぐ

に忘れてしまった。それよりも、飛び散った鹿の体を回収する作業に一時もかかったことを記憶した。そしてそうなることは、衝撃を受けたときからわかっていたのだ。

車内のざわめきは、いくらか落ち着いてきた。目を閉じると、さっきの画面が映し出していたものがチカチカと浮かびあがる。誰かが、警棒の制止を巧みによけながら停まった電車の先頭車両を撮影し始めたのだった。黒い頭がひしめき、怒号が飛び交う。急降下したように画面がぶれた。先頭車両が踏みしめている線路が映った。そこにはブルーシートがあり、不自然な盛り上がりを見せていた。それに、周囲に撒き飛んだ、赤くも黒くも見えるしぶきまでは覆い隠せていなかった。しかも、もつとも覆うべきものがほつたらかちにされていた。それだけが一枚のブルーシートではどうしようもできない所まで飛ばされていた。撮影者はそれをクローズアップした。バッグだった。よくあるバッグだったが、それだけではなかつた。持ち手には手がついていた。腕のどこからか先が、そういう装飾品のように見事に持ち手を握り締めているのだった。これが小さな悲鳴やちよつとした食欲減退のもととなっているのは間違いないかった。

私は、今にもその手が持ち手を握りなおすのではないかと思ひ、一種の懐かしさを込めてクローズアップを眺めた。決して好ましい癖ではなかつたが、Aがああ癖を持つてい

たわけがようやくわかつたように思えた。そして、さっき私の体を揺さぶったのは、Aの体ひとつ分の衝撃だったのだらうと思つた。それにしてもあの衝撃は、やはりすぐにどこかに消えてしまった。軽かつた。残された感触は奇妙なほど軽くて、身震いするほどだった。

目の奥が痛い。頭のどこかも痛い。私はいったいどこに連れていかれるのだろう。

気がつくくと、私は立っていた。

キオスクもない、まるで愛想なしのあのホームに。

くるくると暗闇を巡って、どこにいるかもわからないでいたのに、ある予感を感じたのだった。座席に座ったまま伸び上がり、無理やりに目を開いた。そうして、冷え冷えとした電灯に照らされたホームを目にしたとたん、小さな声を上げて電車を降りてしまったのだ。夢遊病者のようにふらふらと。帳尻合わせのように正確に。

降り立ったとき、誰かに「おかえりなさい」と言われた気がした。辺りを見回す。懐かしくもなんともない、今朝乗り込んだときと同じ情景があるばかりだった。落胆なのか、それとももしかしたら安堵なのか、全身の力が抜けて、次の電車を待とうとはもう思えなかつた。

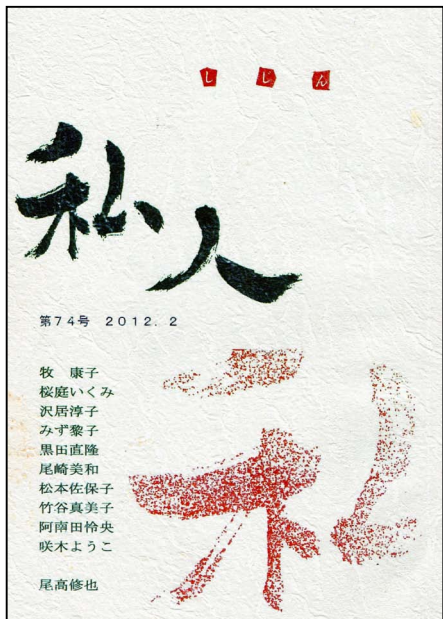
改札を出た。あと数分で無効になるワンデーフリーパスをちぎり、外れ馬券をそうするように捨てた。



尾崎美和

おざき みわ

1976 三重県生まれ
 99 神戸大学文学部卒
 生活情報誌制作会社勤務
 2008年から浦安市在住
 11年秋に朝日カルチャーセンターにて「小説作法受講」
 「私人」同人
 主婦



地下鉄B5番出口。
 細長い階段を上るにつれ、ちらほらと街の明かりが見えてくる。街は、地下鉄の中ほど暗くはない。けれども、どんな明かりに導かれようと、私は自分自身を見失ったままなのだった。コンビニを横目に通り返る。明かりを浴びるのがいやだった。片方だけハイヒールを履いているせいで、不規則な音をたててしまう。ハイヒール、素足。交互に見ながら歩く。
 一瞬ひんやりとした風が吹き、顔を上げる。角を曲がった。だんだんとエントランスが近づいてくる。再び足元に視線を戻そうとしたときだった。エントランス前の生垣に人影があるような気がした。
 立ち止まって目を凝らしてみる。
 その人影もこちらを見ているようだった。生垣から体が離れる。頼りのない、棒切れのような影だ。影は髪の毛を揺らしながら近づいてくる。
 「おねえさん」
 のぞみだった。
 「これ……。買ってくれない？」
 差し出したのは本だった。暗がりに表紙がうっすらと浮かび上がり、それはやはり大空の写真集のように見えた。けれども私は、買うとも買わないとも言おうことができない。ただのぞみの顔だけを見つめる。のぞみも肩をこわばらせて

て私を見つめている。私の目や喉は乾き切っていて、どうすればいいのかその機能を忘れてしまっているようだ。のぞみが、戻ってきた。
 変わってしまったことと、変わらないことと、これから繰り返されるだろう拒絶と受容と。私は何だか受け入れられなかった。ありがたくちょうだいするしかないのだった。
 「うちに来なさい」
 やつとのことですう言う。
 のぞみは、ぱっと目を光らせてうなずき、手にしていた写真集を躊躇なく捨てた。それはバサッと重い音を立てて、生垣の奥に消えていった。
 私は、片足にはいていたハイヒールを脱いで手に取った。これも投げ捨ててしまおうとそちらへ放った。それは生垣を越え、むこうの煉瓦の段にカツンと乾いた音を立て、二、三回弾んだ。ページユの少し変わったおもちゃのように、おどけた動きで段を転がると、コンクリートの柱の陰に吸い込まれていった。
 のぞみはその様子を最後まで見ようとはしなかった。エントランスの方を見やり、棺おけの蓋みたい……。歌うようにつぶやくと、ちっほけな背中を弾ませ、堂々とした足取りで向かうのだった。
 (「私人」74号より転載)

五十嵐勉

ノンチャン、NONCHAN

ワット・ブンムへ
 聖丘寺院へ

新中編小説集

インドシナの戦乱、カンボジアの虐殺をめぐる
 新発売 新しい戦争文学

注文は直接 アジア文化社へ

五十嵐勉

ノンチャン、NONCHAN

ワット・ブンムへ
 聖丘寺院へ

衝撃の新・戦争文学

タイ・カンボジア国境の難民村が、ベトナム軍の攻撃によって壊滅。記憶を喪失して自分の名前もわからない少年は、母を求めて戦場の地へ帰ろうとする——人間の尊厳を問う「ノンチャン、NONCHAN」
 掌の穴から星が見える——虐殺の劇次から、悪の瘴気が立ち昇り世界へ広がっていく。ムソンの呪詛が輪廻の環を巡らせる——「聖丘寺院へ」